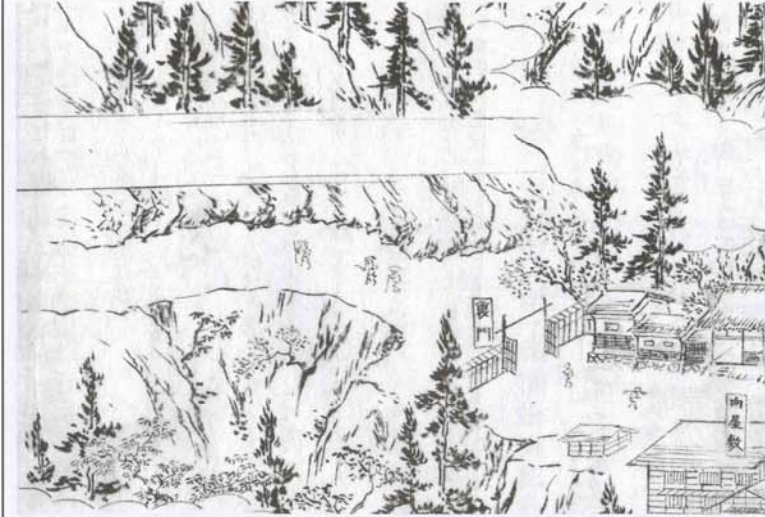


# 高尾山 歴史の散歩道 57

明治大学博物館 外山 徹

## 中興の聖地



薬王院の裏門周辺(国立国会図書館所蔵「八王子名勝志」から)

現在、山内の伽藍を通じて山頂方面へ向かう道筋としては、奥之院不動堂の脇を通るルートがポピュラーだが、これは江戸期の絵図類には確認できない。前号に述べたように、当時は奥之院こそ高尾山の絶頂と見なされており、そこから先に行く道はなかった。

### 裏門

そのため、この道行きもまたいったん石の階段を薬王院まで降りてゆくことになる。

江戸期における別当薬王院の伽藍は、現在の黒門をくぐった正面に唐破風のついた書院の玄関、右手に日本堂、その奥の並びに庫裏、正面書院の左手の崖際を奥に進むと「向屋敷」と呼ばれる宿坊があった。宿坊は崖にせり出しており、書院と連結した渡り廊下をくぐって、さらに進むと裏庭に土蔵があり、その先に裏門があった。

『八王子名勝志』(九世紀後半)の挿絵には黒い冠木門が描かれている。場所は現在の福徳弁財天の前あたりということになる。

江戸時代はじめの寛永八年(二六三二)、幕府老中の連署で高尾山内の通り抜けを禁ずる議定書が作成されている。これは甲州道中の小仏関所を迂回する者を規制する意図であった。当時はまだ由井正雪の寛永事件など、未だ治安の維持に予断を許さぬ時期だった。

『八王子名勝志』には、裏門より山越にして一里十四丁を行く時は、小仏の絶頂にて峠の茶屋として武蔵と相模の境なる甲州街道の往還に出る、これ通例富士参詣道の間道なり

とあり、かつては裏門の外から西へ続くルートが山頂方面を経由して小仏峠方面へ抜ける道筋であった。

制しようとするれば、木戸を設けて通行を遮断する必要はあるが、表門・裏門ともに左右に柵が延び、一見関所の風情とも言える光景があった。後には上柵田村落合に口留番所ができ、高尾山内の通り抜け、あるいは大垂水方面からの通行者を取り締まることになるが、番人の給金が薬王院から支出されていた根拠を辿ると、寛永のこの規制に行き着くのかもしれない。

さて、福徳弁財天の前から西へ延びる道筋に入ると、現在は人の行き来もまばらな森閑とした空間が広がるが、実はその一帯こそ、高尾山の中興開山にまつわる聖地なのである。

### 幻の井戸

徳川幕府の官撰地誌『新編武蔵風土記稿』(二八二三多磨郡之部上梓)には、この界限について、**独鈷水 寺の裏門の外二十歩ばかりを隔**

てて右の方にあり。方二間ばかり深さ八、九尺。相伝う中興の僧俊源独鈷を以て加持しこの所にて水を得しと。

という記事がある。高尾山中を修行の地とした俊源だが、人間の生存には水の存在は不可欠である。すなわち独鈷の井戸こそ、俊源修行の地を示す遺構たり得る存在である。福徳弁財天の洞穴を覗いて分かるように、谷筋には水脈があり、山上とは言え少量ながら水を得ることができたと推察できる。しかしながら、この井戸の場所は現在詳らかではない。安政二年(一八五五)江戸高松勘四郎の絵図には、なぜか独鈷水の位置は南側の谷中に示されている。以降、明治にかけての絵図は何れも独鈷水を谷側に描いているが、これは『風土記稿』の記事に矛盾している。『八王子名勝志』はこの井戸について、**裏門より右の方山腹にあり徑り四尺余、夏日**

### は草深くして至る事果たし

と記しているが、ひよつとするとこの記載はすでに井戸の位置に確証がないが故かもしれない。結局、中興開山にまつわる独鈷水については定かではない状況なのだが、この地で中興俊源の修行の様子についてイマジネーションをふくらませてみたい。

俊源にまつわるストーリーの成立は中興の頃からはかなり後世のものとなる。今日、高尾山縁起としてよく知られているのは寛延三年(一七五〇)付の儒者石嶋仲縁正翁(石嶋筑波)の筆によるものである。中興開山の年とされる永和元年からは三七五年も後のことであり、口承伝承の可能性は否定できないものの、後世の文面である前提で理解せねばならない。しかしながら、そこでどのようなストーリーが語られるか、それ自体は検証の対象とするべきであろう。

### 俊源の高尾山

中興の縁起は次の一節から始まる(原文は漢文)。**後円融帝の五年。震沙門俊源なる者。何処の人なるを知らず。高尾に來遊し以て名嶽となすなり。**

後円融天皇の即位から五ヶ年目は永和元年(二三七五)のこと、当時関東を統べる府は鎌倉にあり、北方へ延びる古街道は分倍河原のあたりを通過して北上していた。高尾の地はそこからさらに西方に分け入った当時としては周縁の地であったのだから、醍醐寺から下向した一人の僧侶がその静かな山間の地を修行にふさわしい場と定めたということになる。

**始め方丈を立て、茅・茨を以て経像を庇う。**

「方丈」とは主に禅宗寺院で長者・住持の居所を指すが、字句のまま解釈すれば一丈二約三メートル四方の小さな庵を手近な材料で形作った、それはまさに経典と仏像を

かろうじて雨水から守る程のものであったと言うことになる。

俊源は京において醍醐俊盛法印に法を受く。遂に今まで累世其の法を継ぐと云う。

俊源は醍醐寺の俊盛を師とし、その法流が現在まで継承されているとする。醍醐寺は聖宝によって貞観六年(八七四)に開かれ、醍醐天皇の帰依を受け興隆。室町時代に入る頃には、天台系の本山派(本山聖護院)に対し当山派と呼ばれる修験者の組織を確立していた。

鎌倉時代には浄土宗、浄土真宗、曹洞宗、日蓮宗といった鎌倉新仏教と呼ばれることになる一派が武士や庶民層に浸透し始めていた。真言・天台の両宗派も地方への教線拡張を志向し、鎌倉末から室町期にかけて醍醐三宝山院流の諸寺院は積極的に関東の拠点寺院へ僧侶を派遣し、あるいは新たに寺院を創建していった。薬王院の本寺である醍醐無

量寿院は、三宝山元海が創設した院家で、その法流は元海の弟子の内、二海から俊賢・俊豪・俊盛と相承され、その弟子僧の内には関東に下向した者のあることが判っている。

相伝う、俊源は勇猛精進。能く擣り事を奉ずと。その浴所は東澗中に在り。称して靈泉となす。

「浴」とは水行と解釈する事例もあるが、「澗」とは谷水の意味なので、山の東側の谷にその場所があったということになる。

現在、水行場と言えは琵琶滝、蛇滝であるが、蛇滝は位置関係が異なる。琵琶滝あるいは、かつて一号路の中途にあった布流滝(古滝)を想定してのことかもしれない。

こうして、人気がない山中で原始の自然に身を委ねつつ修行にはげむ俊源に運命の時が訪れる。

**おことわり** 史料の引用については、読みやすく原文に手を加え、適宜読み仮名を付しています。